routine campus

hiramatu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ｒｏｕｔｉｎｅ　ｃａｍｐｕｓ

【Ｎコード】

Ｎ９９２７Ｇ

【作者名】

ｈｉｒａｍａｔｕ

【あらすじ】

大学の全く活動していない幽霊サークル・総合創作研究会を舞台に、少し毒舌な一年生飯原光樹と、大の酒好きで日々酒におぼれる先輩天谷いずみ、そしてその他の会員たちの日常を綴った、ほのぼの学園小説。

第一講目　酒好きとおれ

「飯原くぅーん、冷蔵庫からビール取ってー。あ、あと棚にある柿ピーとあたりめも」

空き缶に空き瓶、汚れたコップで埋め尽くされた机に突っ伏しながら天谷いずみ先輩はだらしのない声でそう言った。

いずみ先輩は長く絹のように美しい黒髪をテーブル端からだらりと垂れ下げながら、ほんのり赤く染まった頬をテーブルにくっつける。火照った顔にテーブルの冷たさが心地よいのか、その顔がさらにだらしなく緩む。

普段は雪のような純白の肌が薄桃色に染まり、それがとろんとした瞳の深い黒さを引き立てる。鼻梁の通った顔立ちに、長い黒髪、そして純白の肌。着物を着せたらさぞ似合うであろう古風な美女、それがこのいずみ先輩である。

「はいはい……」

部室の隅に置いてある小型冷蔵庫を開け缶ビールを取り、その横のつまみ類が雑多に積まれている棚から柿ピーとあたりめを取りいずみ先輩に渡す。

「ありがと。あ、ピーナッツは嫌いだから飯原くんにあげる」

「いりませんよ、そんなの」

ビールとおつまみを受け取ったいずみ先輩はプルタブを引き喉を鳴らしながらごくごくとビールを飲み始める。俺は苦手なビールの臭いが漂ってくる前に踵を返し、いつも座っている冷蔵庫の近くの椅子に腰を下ろす。

平日の昼間から柿ピー食ってビールがぶ飲み、なんて絵に描いたようなダメ人間だろう。ほかにも『せっかくの美人が台無しだな』とか『この人の肝臓は大丈夫なんだろうか』なんてことを思いつつ、

ビールをかっくらういずみ先輩をぼんやり眺める。
「どうしたの？　ボーッとしちゃって。あっ、もしかして飯原君も飲みたいのー？」
俺の視線に気づいたいずみ先輩はだらしのない声を出しながらこちらに視線を移す。しかしその声とは対照的に、酔いが回りほのかに赤く染まった頬、とろんと目尻が下がりどこか甘えるような視線を向ける瞳はその整った顔立ちとも合わさり、何とも言えない妖艶さを放っている。いずみ先輩とは初めて会ってからもう一ヶ月近く経つが、時たま見せるこんな色っぽい姿には度々ドキリとさせられる。
狭い部室で美女（見た目に関しては）とこうして二人きり、男としてこんなに美味しいシュチュエーションは他にないだろう。しかしすることといえば、毎日ボーッとしたり、本を読んだり、課題をしたりしながら先輩が飲んだくれる姿を眺めるだけ。十分美味しい？　確かにそうかもしれない、けど大学一年生でこんな非生産的な毎日を過ごしているのはどうなんだろうか。
そう、俺はもう大学生なんだ。大学生といえばバイトにサークル、そして合コンに恋愛。わかりやすいイメージだけを切り取った感は否めないが、世間一般の人が思い描く大学生活もこんなものだと思う。しかし実際は先ほど述べた通り。イメージしていた大学生活とは随分とかけ離れている。
それならこんなところに毎日足繁く通ったりしないで別のサークルにでも入れば良いのだが、そこは今の生活を変える事へのめんどうさと、新しい世界飛び込む事への勇気の無さ、そして無条件で美女と会えることへのスケベ心に足を引っ張られ、気づけば一ヶ月近く毎日ここに顔を出している。
ここは明応大学総合創作研究会の部室。文化系サークルの集まる文化棟の最上階、さらにその一番端と言う大学内でも屈指のアクセスの悪さを誇る。そのため、わざわざここまで見学にやってくるような入会希望者はほぼ皆無である。

そして総合創作とは言っても、漫画が好きな人は漫研に入るし、小説が好きな人は文学部に入る。結局こんな中途半端で実態の解らない怪しげなサークルに入ろうとする人なんかはいない。
まぁ他にも勧誘やビラ配り、ポスター貼りなんかも一切していないので、自然に人が入ってくる方がおかしいと考えるのが普通だろう。ここまで言ってしまうと、なんだか俺自身すごく惨めな気もしてくるけど……。
「飲みませんよ、そんなマズくて変な飲み物」
「もう、なんでこの美味しさがわかんないかなー」
自分が大好きなお酒をけなされ、いずみ先輩はぷくっと頬をふくらませる。
「体質なんです、仕方ないでしょう」
俺の家は父母ともに下戸の家系で、息子の俺は当然下戸のサラブレッドである。酒は一滴も飲めないし、それどころかアルコール成分入りのボディペーパーで体を拭くだけで、体中真っ赤になるほどアルコールに対して免疫がない。
「こーんなに美味しい物が飲めないなんて。飲める人の五分の四は人生損してると思うなぁー」
「そんな物に毎日溺れてる方が、人生損してると思いますけどねぇ」
率直な意見を素直に述べると、いずみ先輩はさらに頬を膨らませながら不機嫌そうに声を漏らす。
「飯原くんはさぁー、先輩を敬うってことを本当に知らない子だよねー」
「そんなこと無いですよ。酒浸りの毎日を送ってて、人が掃除しないと三日で部室をゴミ屋敷に変えちゃう人でも、一応先輩は先輩ですから」
「その言い方がもうバカにしてるのっ！　まったく……飯原くん、おかわり！」
ぷいっと顔を逸らし、いずみ先輩はやけ酒モードに入ったらしい。やれやれ、なんて漫画みたいな台詞を心の中で呟きながら冷蔵庫の

扉に手を掛け、中にギッシリと詰め込まれたビールに手を伸ばす。
と、そのときだ。
立て付けの悪い鉄の扉がギシギシと嫌な音を立てながらゆっくりと開き、扉の向こうから好青年を絵に描いたような、爽やかな少年が部屋に入ってきた。
「こんにちはー。って、今日もいずみ先輩と光樹だけか」
その爽やかな少年――栗山竜一は部室を見渡し見慣れた二人しかいないのを確認すると、壁に立てかけられていたパイプ椅子を開き、腰掛ける。
この栗山は高校の時の同級生で、俺がこのサークルに入るときについでと言ってはなんだが、一緒に入会した。ちなみに栗山は陸上部も掛け持ちしているため、陸上部の練習が無い日のみ参加と言うことになっている。
ついでに言っておくと、光樹と言うのは俺のことだ。
「珍しいな、今日って陸上部の練習ある日じゃないのか？」
「急遽休みになってね。そう言えば、光樹もいずみ先輩も、一階の掲示板見ました？」
掲示板と言うのは文化棟一階にある各サークルへの連絡用掲示板のことで、普段は文化祭やサークル対抗の球技大会なんかの時にしか使われていない。
そのため栗山の言葉を聞いた二人の頭の上には当然のごとく『？』マークが並ぶ。リアクションが示すとおり、そんなものはもちろん見ていない。
「口で説明するよりこっちの方が早いと思うんで、どうぞ」
そう言って栗山はポケットから携帯電話を取り出し、画面を俺といずみ先輩の方へ向ける。
画面には何行か文が書かれている白い紙の画像が表示されている。恐らく掲示板に貼られていた連絡用の書類なのだろう。
恐らく携帯電話の画面が見えていないであろういずみ先輩のために、俺はその紙に書かれている文章を音読しながら目を通す。

そして、その内容を把握した途端、絶句した。
「総合創作研究会は近年活動している様子や、活動の結果が全く見られないことから、一週間以内に何かしらの活動を示さなければ廃部――――って……」
「へぇー、廃部……って、えぇ――――――っ！！」
途中までのほほんとあたりめを咥えながら聞いていたいずみ先輩が大声でわめきながら立ち上がる。今のこの通知に驚くあまり酔いが覚めたのか、いずみ先輩の表情も先ほどより幾分か引き締まって見える。
絶句する俺、さわぐいずみ先輩、二人とも反応は真逆だが、驚きのあまり普通じゃない、と言う点では共通している。
そしてそんな中、一人冷静な栗山が静かに口を開いた。
「これ、かなりマズイ状況ですよね？　しかも一週間以内って……」
「と、とにかく学校に聞きに行きましょう！　飯原くん、栗山くん、行くよ！」
そう言っていずみ先輩は部室をものすごい勢いで駆け出て行ってしまった。その後に栗山が続き、最後には俺だけが部室に残された。
確かに代わり映えの無い毎日は嫌だと言った、だけど神様もこんなにも急に波風を立てる必要無いんじゃないだろうか。
「やれやれ……」
今度は心の中でなく、自然とその言葉が口の中から漏れ出した。。
部室の扉に鍵を掛け、戸締まりをしっかりと確認した後、俺は急ぎ足で一階へと向かった。

第二講目　頼れる先輩とダメ人間

詳しい事情を聞くために自治会実行部に集まったいずみ先輩、俺、栗山の三人。応接室的な部屋に通され、係の人が来るのを待つ。

その待っている間の様子は三者三様で、いずみ先輩は鼻息荒く、興奮を隠し切れていない。その隣の栗山はいつも通りの涼しい顔で足を組みじっとしている。一方の俺はと言うと、そわそわ落ち着かず、用もないのに携帯電話を開いてみたり、キョロキョロと窓の外を眺めてみたりと、なんだか自分の肝っ玉の小ささが嫌になる。

部屋に通されてから五分ほど経った頃、慌てた様子で一人の男性が奥の扉から入ってきた。

「すいません、ちょっと他の仕事がありまして」

ぺこぺこと頭を下げるその男性。恐らくかなり急いで来てくれたのであろう、額には汗が浮かび、そのせいで前髪が額に張り付いている。

「あ、俺自治会実行部の塩崎って言います。それで、今日はどんなご用で？」

ソファーに腰を下ろした塩崎さんが息を吐くまもなく、いずみ先輩は噛みつく様な勢いで口を開く。

「廃部って一体どういうことですか！？　確かに私たちはきちんとした活動はしてませんけど、それにしても何の通知もなく突然こういうのってひどいと思います！」

勢いよくソファーから立ち上がり、黒絹の髪の毛を振り乱しながら、いずみ先輩は烈火のごとく勢いでまくし立てる。これではたまらない、と言わんばかりな塩崎さんにまぁまぁ、と諭され、いずみ先輩は多少落ち着いた様子で再び腰を下ろす。しかし興奮が収まっ

ていないようすで、唇をとがらせ分かり易い不機嫌顔を作っている。
普段は温厚……と言うより、少々抜けたところのあるいずみ先輩が、こんな剣幕で人を責め立てるところを俺たち二人は見たことが無い。なので今目の前の光景がどうにも飲み込めず、ぽかんとした表情でお互いに顔を見合わせる。
でもこれだけ真剣になるってことは、なんだかんだでサークルのことを考えてはいるんだな。そう思うと、さっき部室で先輩をバカにしたのを、少しだけ後悔した。
「自治会としても総合創作研究会は歴史のあるサークルですし、あまり波風を立てたくないので廃部と言うのは嫌だったんです。でも、何せ不況で学校側も経費削減にやっきになってましてね……」
学校側から正式にサークルとして認可されているサークルには、年間を通して学校から活動費が支払われるのだ。しかし通常は年間を通して何かしらの活動をしていなければその活動費は支払われない。にも関わらず総合創作研究会は、なんと五年にもわたり無活動のまま活動費を受け取っていたと言う。このサークルの厚かましさと、学校側の長年にわたる怠慢がその原因だろう。
しかしまぁ、学校側からすれば金だけもらって何もしないお荷物サークルを切りたいと考えるのはあたりまえか。色々とやり口に問題はある気がするが、学校側の言い分は十分に理解できる。
「それに、このことを連絡しようと前に天谷さんに連絡したんですよ？　なのに自治会にも来てくれないし……」
「へ……？　連絡？」
額の汗を拭きながら塩崎さんが困ったようにしぼり出した言葉を聞いて、いずみ先輩は目を点にする。そしてその顔のまま俺と栗山の顔を交互に見るが、もちろん俺たちがそんなこと知るわけもない。
「一ヶ月前に連絡させて頂いたんですけどね。そのときはちゃんと、来ると言ってもらったんですが、当日いくら待っても来ないので……」
「えっと、それは多分……寝てた、かも」

顔全体を真っ赤にし、伏し目がちのままもじもじと呟くいずみ先輩。普段ならばこういう恥じらいのある姿もかわいいなー、なんてことを思ったりするのかもしれないが、今はただただ呆れるばかり。口を開けど出てくるのはため息だけだ。

金だけもらって何の活動もせず、親切心からの連絡も無視し、ギリギリになって自治会に噛みつく。常識のある人ならば中々出来ない暴挙である。もちろん悪意があってこうなったわけではなく、図らずもこうなってしまっただけなのだが、結果として非常識極まりないことをしているのは間違いない。

先程までの勢いはどこへやら、いずみ先輩は塩崎さんと目も合わさずひたすらに謝り倒す。こちらがとても失礼なことをしたにも関わらず、塩崎さんは気にする様子もなく、再び、まぁまぁ、といずみ先輩を落ち着ける。

しかしいずみ先輩はすっかり気落ちしてしまったらしく、涙目のまま下を向き黙ったまま。何とか場をつなごうと俺が口を開きかけた瞬間、横から静かな口調で栗山が言葉を発した。

「あの、廃部を免れる条件として、一週間以内に何かしらの活動結果を示す、とあるんですが、具体的にはどのようなことをすれば良いんですか？」

冷静な栗山の声が、先程まで浮き足立っていた部屋の空気を一瞬で落ち着かせる。

そうだ、まだ廃部が決定したわけでは無い。一週間しか時間は無いが、その活動結果とやらの内容次第では十分に廃部を阻止することが出来る。栗山の言葉を聞き、すっかり落ち込んでいたいずみ先輩もひょこっと顔を上げ、僅かながらに元気を取り戻す。

僅かな希望の籠もった潤む瞳を輝かせ、いずみ先輩は塩崎さんの顔を一点に見つめる。俺もいずみ先輩ほどでは無いが、期待を込めた眼差しで塩崎さんの口から発せられる言葉を今か今かと待つ。

「文化系のサークルですから、何かしらの創作物を提出すれば良いと思いますが……」

「創作物と言うと、漫画や小説、絵なんかですか？」
「そうですね。でも学校側も考えてまして……その創作物が他のサークルの作品と同レベルでないと、総合創作研究会の存続は認めない、とのことです」
つまり漫画なら漫研、小説なら文芸部と同レベルの作品を作って提出しろ、と言うことだ。それは普段何もしない幽霊サークルにはあまりに高いハードルで、俺たちの希望を打ち砕くには十分な威力を持っていた。
しかも期限は一週間。他のサークルが一ヶ月も二ヶ月もかけて作り上げる作品と同レベルの物を一週間で作れ、と……。結局この通知には廃部を免れる方法などあってないがごとし。ただの廃部通知だったのだ。
それを知った俺と栗山はただ絶句するばかりで、もう何も話すことが出来ない。いくらなんでもこれでは……。残り一週間、ただ黙って廃部を待つだけなのか。
と、普通の人ならこう考えるのだが、やはり俺の隣に座るこの人はどこかぶっとんだ頭の作りをしているようで、
「わっ……かりました！　やります！　一週間で漫画でも小説でも、凄いの作ってやります！」
テーブルを両手で力一杯叩きながらいずみ先輩がおもむろに立ち上がる。他三人が突然の出来事にぽかんとする中、いずみ先輩は、決まった、とでも言いたげに悦に入っている。
また無茶なことを言い出したな、この人は。俺は顔を伏せ、さも呆れた様なリアクションを取る。しかしその伏せた顔には、何故かこらえきれず笑みがこぼれた。
多分このまま話が進めば間違いなく面倒なことに巻き込まれるだろう。しかし、黒い瞳に希望という光を燦々と称えながら仁王立ちするいずみ先輩は不思議と頼もしく、多少の面倒ごとなら、まぁいいか、何故かそんな風に思えた。
「で、でも出来るんですか？　失礼だけど、君たちに出来るとは思

えな」
「出来る出来ないじゃなくて、やるんですっ！　成せぬは人の成さぬなりけりって言葉知らないですか？」
「いや、その言葉は知ってますけど……」
江戸時代の偉い人の格言まで持ち出し、いずみ先輩は有無を言わせぬ力押しな理屈で塩崎さんを黙らせる。
「それじゃあ時間がもったいないので、失礼します。飯原君！　栗山君！　時間無いんだから急ぐよっ！」
そう言い放つといずみ先輩は扉を勢いよく開き、ものすごい勢いでどこかへ走り去ってしまった。
取り残された三人はしばしの間時間が止まったように静止していたが、一番に状況を飲み込んだ栗山が席を立ち、無言で塩崎さんに会釈をしたあと早足で応接室を後にする。
「あっ、えと……じゃ、じゃあ失礼します」
塩崎さんと二人残され、気まずさに耐えきれず俺はすぐに先輩と栗山の後を追った。塩崎さんすいません、すごく無礼なことをしてるのはわかってます、お詫びは今度必ずします。
応接室を出て当たりを見渡すが、先に部屋を出た二人は見あたらない、しかし行く場所と言えば部室ぐらいなはずだ。俺は迷うことなく文化棟へ急ぎ足で向かった。
自治会と文化棟の途中にも二人はおらず、そのまま文化棟に到着。そして部室へ向け階段を上り始める。建物が古いせいか極端に角度が急な階段を急いで上るが、慢性的な運動不足である俺はすぐに息を切らし、歩みの速度を徐々に緩める。
それにしても二人が見えない。二人とも随分急いで部室に向かったんだな。そう思いながら五階に差し掛かったとき、五階と六階の間の踊り場にうずくまる女性の姿を見つけた。その傍らには爽やかな少年、というか栗山が立っている。
「えっと、これはどういう状況？」
「ぎゅ、ぎゅうにはじっだがだ……ぎ、ぎぼぢわるい」

上手く舌も回らず、なんとも聞きづらい声でそう答えると、いずみ先輩はなるべく頭に振動を与えないようにゆっくりと振り向く。すっかり真っ青になった顔に、涙をいっぱいに溜めたうつろな目と、その美貌が見事に台無しだ。さすがに今のいずみ先輩は美人とは言い難い姿をしていた。

このままでは他の人にも迷惑がかかるし、ここで吐かれでもしたらそれこそ大惨事だ。すぐに先輩を抱きかかえ、栗山にちらりと目配せする。察しの良い栗山はすぐに俺とは反対の肩を抱え、二人でゆっくりといずみ先輩を部室まで運ぶ。

自分勝手と言うか、情緒不安定と言うのか……やっぱりこの人はどうしようもないダメ人間だ。さすがに『俺が居ないと本当にダメなんだから』みたいな痛々しいことを思いはしないが、この人は早く彼氏でも作って結婚した方が良いと思う。このまま一人で生きていけば、数年後には間違いなく人として最低のところまで堕ちているはずだ。

でもわざわざ好きこのんでこんな人を選ぶ人はいない、か。いずみ先輩は美人だけどそれ以外の点で人としてマイナスな面が多すぎる。しっかりした良い男性が現れるとは到底思えない。

そんな失礼なことを考えつつ、俺は栗山と一緒に先輩を抱えながら、ゆっくりと階段を上っていた。

部室に到着し先輩をソファに横たえたところで、先輩から、今日は解散、との指令が出た。時計もすでに六時を回っており、普段ならもう帰っている時間だ。栗山はこの後バイトがあるので先輩の言葉に甘えすぐに帰ったが、特に予定のない俺はもうしばらくの間部室に残ることにした。

「べ、別に帰っても良かったのに……」

先輩は申し訳なさと恥ずかしさからか、横になったときに俺が掛けたタオルケットで顔を隠しながら、ぽつりと声を漏らす。

「先輩を一人にしておくと心配ですから。色々と」
「もしかして心配してくれてるの……？」
先輩はタオルケットから顔を上半分だけ出し、俺の方に視線を向ける。横になったおかげで少し落ち着いたのか、顔にも僅かながら血の気が戻っている。しかしまだ気持ち悪さと戦っているせいか、目には溢れんばかりに涙を溜め、まるでチワワみたいに黒い瞳をうるうるさせている。
「ええ、一応は」
このまま放っておいてソファの上で吐かれでもしたら、部室が大変なことになる。そして万一いずみ先輩が嘔吐物を詰まらせて死亡、なんて地方新聞の隅っこの記事にでもなりそうなことになりでもしたら、それこそ後味が悪い。
そんな先輩の健康状態は完全無視な理由を述べようと口を開く。しかし先輩の顔に視線を移した瞬間、そんな言葉はどこかに消え去り俺はただ閉口していた。
「ごめんね……いっつもいっつも迷惑ばっかりかけて」
透明な雫が一粒、二粒といずみ先輩の頬を伝い落ちていく。そしてその雫はソファに染み込み、濃い色の斑点となってその場に残る。
俺は突然の出来事に状況が飲み込めず、ただ右往左往するばかり。しかし、いずみ先輩にはそんな俺が見えていないのか、言葉を続ける。
「飯原くんが優しいから、つい甘えちゃって……ごめんね」
ぽろぽろと涙を流し、とても感傷的な気分に浸っているいずみ先輩の横で、俺は激しく焦っていた。
実際のところ先輩の体なんてこれっぽっちも心配していない。心配なのはソファを含めた部室が汚れるか汚れないか、それだけだ。だが先輩は俺の思惑を見事に勘違いし、自分のことを心配してくれていると思いこみ、あげく涙まで流している。
もちろん先輩にこんなことを言われて、嬉しくない訳では無い。しかし本当は先輩のことを全く心配していなかった、という事を考

えると手放しで喜ぶわけにはいかないのも、また事実だ。
「いや、まぁその……やっぱり具合の悪そうな人を放っておくのは、さすがにマズイかなぁーと」
よくもまぁこんなことを言えた物だ。我ながら自分の日和りきった性格が嫌になる。
「ありがとう……飯原くん」
そう言って俺を見るいずみ先輩の瞳は、この世の一切の汚れなどとは無縁な、澄み切りまるで聖者の瞳のごとく純粋な眼差しを俺に向けていた。
やめろ、その目で俺を見ないでくれ！
何の漫画だ、と思いたくなるような台詞を、俺は心の中で繰り返す。ここまで来ると俺の良心もそろそろ限界だ……早く本当のことを言って楽になった方が良い。
しかしいずみ先輩の清らかな眼差しが、俺にそれをさせてくれない。こんな目で見られて、本当は先輩の事なんてこれっぽっちも心配してません、心配なのは部室が汚れる事だけです、なんて誰が言えようか。
「い、いえ……それよりも、あんまり泣かれるとその……こっちとしても対応に困る、と言うか、その……」
普段のクールぶった口調もどこかへ吹っ飛び、慌てふためきながら言葉を返す。
「あっ、ごめんね、急に泣いちゃったりして。飯原くんの気持ちが嬉しくてさ」
右手で涙をぬぐい、まだ赤い目のまま先輩は笑顔を作る。その先輩の健気な行動が、ますます俺の罪悪感を肥大させていく。
「そ、そんな先輩が言うほど、俺は優しい人間じゃありません」
「遠慮しなくても良いよ、私わかってるから。素直じゃないし、いっつも私の悪口言うけど、飯原くんって、本当はすっごく優しい子だってこと」
こんな褒め言葉を聞いて、俺は恥ずかしさと罪悪感から、先輩か

らとっさに視線を外し、赤くなった顔を伏せる。
いずみ先輩はそんな俺を見ながら、さらに言葉を続ける。
「それに、今日はなんだかごめんね、大変なことに巻き込んじゃって」
「い、いえ……」
赤らめた顔を伏せながら、答える。
「私だって自分でも、無茶なこと言ってるなーって言うのはわかってるんだよ？　でも飯原くん毎日ここに来てくれるでしょ？　もしここで廃部を受け入れたら、なんだか飯原くんの居場所を壊しちゃうような気がしてさ。それなら無茶してでもがんばろうって思ったんだ」
私がお酒飲む場所もなくなっちゃうしね、と照れ隠しにいずみ先輩は続けた。
俺は、さっきまで先輩を全く心配していなかった自分に対して腹が立ち、それと同時にとても情けなく思った。自分のことをこんなに考えてくれる人が目の前にいて、ソファが汚れる、部室が汚れる、なんて事を考えていた自分の人間の小ささ、考えの浅はかさに。
こんなことを言われては、本当のことなど言えるわけがない。しかし、ここで黙っていては先輩の気持ちに申し訳が立たない。
「あの、先輩実は……」
意を決し、顔を上げ、俺が口を開いた瞬間、
「……ぅ……り」
「え？」
「……むり」
「何ですか？　はっきりしてく」
「もうダメ！　無理！　吐くぅっ！」
そう言ってソファーから飛び起きた先輩は部室の隅に置いてあるゴミ袋へと向かう。そしていずみ先輩は……。
まぁ、その……何をしているかは言わなくてもわかるだろうし、口に出すのも憚られる。察しの悪い人に対してヒントを出すと

すれば、岐阜の温泉で有名な街の名前とかを調べてくれれば何となくわかるのではないだろうか。
空気が読めないと言うのか、自由奔放と言うのか……。呆れかえり思わず溜息を吐くも、先輩をこのまま放っておくわけにもいかない。
涙を流しながら嗚咽する先輩の背中を、俺は頭を抱えながらずっとさすり続けた。

第三講目　良い先輩と悪い先輩

翌日。講義が終わり次第すぐに部室に向かい部室の扉を開けると、そこにはいつものようにだらしのない姿勢で缶チューハイを飲むいずみ先輩の姿があった。

扉の開く音に気づいたいずみ先輩は、頬をぺたんとテーブルに着けたままひらひらと右手を振る。

「飯原くんいらっしゃーい。昨日はごめんねー」

謝ってくれるのはありがたいのだが、それならばまずその左手の酒をどうにかしてほしい。先輩がそんなもの飲まなければ、昨日あんなことにはならなかったのだから。

「また飲んでるんですか？　昨日あんなことあったのに」

「だからほらー、今日は缶チューハイだよ？」

「酒は酒です。て言うかビールとアルコール分変わらないじゃないですか」

むしろ先輩の飲んでいるチューハイはアルコール分８パーセントなので、普通のビールよりも高い。

「でもやっぱり甘いとあんまり酔えないんだよねー。あれかな？ぷらしーぼこーかってやつー？」

いずみ先輩は舌っ足らずな声を出し、くすりと微笑みながら首をかしげる。

知りませんよ、そう呆れながらため息を吐くと、俺はいつもの指定席に腰を下ろした。

座ったまま昨日の事件現場に視線を落とす。昨日は大変だったな

……。ゴミ袋に吐いてくれたのは良いけど、その袋が透明だったから中身丸見えで気持ちが悪いし、部室中酸っぱい臭いで気持ち悪いし。

もちろん後処理を抜かりなくやったため、未だに部室が酸っぱい、なんてことは無いが、それでもやはりどこか気持ちが悪い。それなのに無神経にも酒を飲んでいるいずみ先輩に、今日は一段と苛立ちが募る。

「それよりも、どうするんですか？　あと六日しか無いんですよ」

苛立ちをぶつけるように、俺は厳しく冷たい口調で言い捨てる。

「そのことなら……」

言葉の途中でチューハイをぐいっと飲み干し、ぷはぁ、と息を漏らす。そして勢いよく立ち上がりながら、

「私に任せなさいっ！　ちゃーんと考えてあるんだから。あとチューハイおかわり！　次はパイナップル味のでおねがい」

腕を組み、中々にふくよかな胸を偉そうに反らしながら、いずみ先輩はそう言ってのけた。自信満々ないずみ先輩は当てにならないと言うことが、昨日の応接室での一件でわかっているので、もちろん俺がその言葉を信じることは無い。と言うか、まだ飲むんですか。

はいはい、と気のない言葉を返しつつ、冷蔵庫の扉を開く。ズラリと並んだ缶ビールの隙間に、今日買い足したと思われる缶チューハイがぽつぽつと混じっている。その中からパイナップル味の缶チューハイを選び、いずみ先輩のもとへと運ぶ。

「ありがと、飯原くんも飲」

「みません」

言い終わる前に俺に断られ、いずみ先輩はつまらなそうに頬を膨らませる。

「それよりも、これからどうするか、いずみ先輩の案、一応聞かせて下さい」

「えぇーそんなに聞きたいー？　それならもうちょっとちゃんと頼んでほしいなー」

バラのように紅く、ぷくっと厚い唇をにやにやと横に広げながら勝ち誇った表情を浮かべ、その視線を俺の方に向けた。
正直いずみ先輩の案がどれほど当てになるかは甚だ疑問だが、万が一と言うこともある。そして俺自身良い案が思いついていなかったため、ここは素直に折れ、先輩の案を聞くことにした。
「はいはい。どうか先輩の名案をこの頼りない後輩に教えて下さい、お願いします」
抑揚もへったくれも無い棒読みで懇願してはみたが、調子に乗りやすい先輩がこれで満足する訳もなく。
「もう、全然ダメ！　もっとこう、渇望するような心の叫びって言うのか、なんて言う」
「どうか先輩の素晴らしい名案を、この馬鹿で頼りない後輩に教えて下さい、お願いします」
先程より少しだけ抑揚をつけ、へりくだった口調で、先輩が言う渇望するような心の叫びとやらを表現してみた。
しかし俺が先輩をまだ馬鹿にしているのは明らかだ。ちょっと意地悪が過ぎたのか、いずみ先輩の顔が見る見るうちに不機嫌顔へと変化していく。そろそろ折れ時かな。
「すいません、ちょっとふざけすぎました。先輩の案教えてもらって良いですか？」
今度は普段と変わらぬ普通な、しかし先程の棒読みに比べれば遙かに誠意のこもった口調で先輩の案を請う。
いずみ先輩は口元に右手を当て、数秒間考え込むように間を開ける。そして、うん、わかった、と笑顔で答えると、その案を話しはじめた。
「まず、私以外の会員もこのサークルに居るってことは、前に話したよね？」
俺が入会して間もない頃、あまりに人が来ないので、他に会員の先輩とかはいないんですか？　と聞いたところ、いるよー、でももう何ヶ月も会ったこと無い、といずみ先輩はいともあっさりと答え

て見せた。俺がこのサークルの存在に疑問を持ち始めたのも、その頃である。
小さな声で返事をし、それを確認すると、いずみ先輩はさらに話を続ける。
「私以外の二人は漫画と小説を書いてる人でね、確か昔に見せてもらったときは、二人とも結構上手だったと思うの。それで、今回はその二人に協力してもらおう、と思うんだけど……飯原くんはどう思う？」
途中までは堂々と自信に溢れた様子で話していたが、言葉の末尾に差し掛かった途端、なぜかいずみ先輩は不安げに語尾を弱め俺の意見を伺う。恐らく自分一人で話を進めすぎているのではないか、と危惧したのだろう。
もし先輩が俺の意見も聞かず、いつもみたいに一人で勝手に話を進め続けるようなら、それは皮肉や嫌みの一つぐらい俺なら言うはずだ。しかし、こんな憂えの籠もった瞳で不安げに見つめられては、何か不満な点があったとしても言えるはずがない。
先輩自身は凄く心配そうだが、今聞いたいずみ先輩の案は取り立て文句をつけるようなところは一つも無い。いずみ先輩以外の三年生に協力を頼む、なんて案も恐らく俺からは出た無かっただろう。この案については全面的に賛成だ。
「全然良いと思いますよ。それにいずみ先輩以外の先輩に協力頼むっていうのも、俺じゃ考えつかなかったと思いますし」
「そ、そうかなー？」
そう言いながらいずみ先輩はチューハイをくいっと喉に流し込む。酔っているのか照れているのかはわからないが、頬はほんのり桜色に染まり、落ち着かなそうに笑みを作っている。
「それで、その先輩達にはいつ連絡するんですか？」
「あ、それならもうしてあるよ。五時半に部室集合って」
壁に掛けられた安いキャラクター物の時計に視線を移す。時刻はもう間もなく午後五時といったところで、その集合時間にはあと三

十分ほどある。
　じゃあその間はのんびりしてようか、と言ういずみ先輩の提案を受け入れ、俺と先輩は特別なことは何もせず、思い思いに時間を潰す。いつもと変わらぬのんびりとした時間が部室に流れていく。
　しばらくすると遅れて栗山が部室にやってきた。今日は陸上部の練習は休みだったのだが、部で少しばかり集まりごとがあったらしい。
　俺が栗山に先輩の提案を説明し、それが終わったら、今度は三人思い思いの事をしながら五時半まで静かに過ごした。
　そして集合時間の五時半になる少し前、普段この三人が集まっていれば動くことの無い扉が、ゆっくりと開いた。
「いずみさんお久しぶりですー。突然だから焦りましたよ」
　そう言って部室に入ってきた男性はいずみ先輩に会釈をする。
　短い顎髭を蓄え、がっちりした体型のその男性は、その後すぐに二人並んで座っている俺と栗山の方へ視線を移す。
「おっ、もしかして君たちがいずみさんの言っていた一年生？　こんなサークルに二人も一年生入るなんてなー」
　その男性はのしのしと大股で俺たちに近づくと、俺と栗山の顔を交互に見る。
「俺は商学部二年の関本　祐輔、小説担当って事になるかな？」
　気さくな笑みを浮かべながら、顎髭をいじる関本さん。近くで見ると関本さんの体はさらに大きく見え、その見た目は小説書きと言うより、ラガーマンかアメフトの選手と言った方がしっくりくる。
　俺と栗山が会釈しつつ自己紹介を終えると、関本さんは壁際のパイプ椅子を持ってきて、俺たちの近くに腰を下ろした。
「それにしても、関本くんに来てもらえてよかったわー。これで小説に関しては問題なしねー」
　そう言うと先輩はだらしなく顔をテーブルに横たえた。薄紅色に染まった頬がテーブルに押しつけられ、柔らかそうに僅かにつぶれる。そして長く艶やかな黒髪を右手でいじりながら、飯原くんおか

わりー、と間の抜けた声を上げ、再び先輩の顔はぐでーっとだらしなく緩んでいく。
俺は冷蔵庫の扉を開き、先輩に渡すチューハイを選ぶ。特に味のリクエストはないし、オーソドックスに梅でいいか。缶チューハイを右手に持ったまま冷蔵庫の扉を閉め、先輩の元へと歩み寄る。
「関本さんってそんなに小説書くの上手なんですか？」
チューハイをテーブルに置くと、先輩は俺に礼を言うのも忘れて、缶のプルタブを引く。
「上手だよー。何てったって去年ＥＬ小説大賞の第三選考まで残ったんだから」
顔をテーブルに乗せたままの、行儀もへったくれも無い姿勢のままチューハイを飲む先輩。こんな姿勢で飲んでいるため唇の端からは、口に入らなかったチューハイは滴り落ち、ぽたぽたとテーブルに透明な斑点を作る。俺は几帳面にも、その水滴を台拭きで一々拭いていく。
今先輩が言ったＥＬ小説大賞と言うのは、エレクトリック（ＥＬＥＣＴＲＩＣ）文庫と言うライトノベルレーベルが主催する、ライトノベルの新人賞の名前だ。俺自身はそんなにライトノベルを読む機会がないので、どの位凄いことなのかは良く解らないが、三次選考まで残るのは、まぁ凄いことなのだろう。実際の凄さが解る人が聞いたら、烈火のごとく怒られそうな言い方な気もするが。
それにしても、そんな凄い人がこのサークルに居てくれて良かった。安堵感の籠もった目で関本さんの方を見ると、当の関本さんは照れているのかどこか落ち着かない表情を浮かべる。
そして大きく息を吐くと、意を決したように口を開く。
「じ、実はですね、去年から小説全く書いて無いんですよ……ス、スランプ、と言うのか、なんと言うか……」
絞り出すような弱々しい声でそう話す関本さん。そのがっちりと大きな体が、言葉を絞り出すたびにどこか縮んでいくように思えてくる。

「でも、その気になれば一週間でちゃちゃっと」
「書けません……」
「多少作品の質を落とせば」
「書けません……」
「そんなに多くなくて良いなら」
「書けません……」
「一文字も……？」
「一文字もです……」
その瞬間、いずみ先輩の右手からチューハイの缶が滑り落ちた。落ちた缶の口からは泡を含んだチューハイがあふれ出し、テーブルの上を濡らしていく。俺は慌てて台拭きを手に取りそれを拭きにかかる。
目を点にしたままいずみ先輩は関本さんの方へ顔を向け、そのまま無言で固まってしまった。がっかりするのは解るが、先輩のリアクションは少々失礼すぎる。関本さんも先輩のそのリアクションを見て罪悪感にかられたのか、申し訳なさそうに目を伏せる。
「で、でもそれ以外のことで協力してもらえば、それでも助かりますよ。ねぇ先輩？」
と、先輩の顔を見るが、先輩は口を金魚みたいにぱくぱくさせて、部屋の上隅の方を眺めるだけ。あー、ダメだこの人、放っておこう。
「悪いね、本当に……」
「いえ、気にしないで下さい。それに、まだ漫画の上手い先輩がいるんですよね？」
俺がそう言った途端、関本さんは目線をふらふらと泳がせ、明らかに慌てた様子を見せる。何かまずい事を言ったかな？　そう思うものの、今の俺の言動に不備があったとは思わない。
理由を聞き出そうといくつか訪ねてみるが、関本さんから返ってくるのは煮え切らない言葉ばかりで、その理由には全くたどり着かない。最終的には、まぁ後になればわかるよ、と思わせぶりな言葉を残して、関本さんは口を閉ざしてしまった。

ここまで含みのある物言いをされて気にならない訳がない。しかしそのことについて関本さんが話したく無いのなら、やはりそうしておいた方が良いのだろう。
それからは未だ抜け殻みたくなっている先輩は放置し、俺、栗山、関本さんの三人で取り留めのない会話を続けた。

三人で話しはじめて十数分。時計の針が縦に真っ直ぐ突き立ち、卯の刻――つまり六時になったことを告げる。
先輩が関本さんともう一人の先輩を呼びつけた時間は五時半。それを三十分以上過ぎているにも関わらず、そのもう一人の先輩は現れないどころか、連絡すらよこさない。
いつもならもう帰っている時間だし、今日はもう来ないんじゃないだろうか。そう思い、数分前にようやく復活したいずみ先輩に、今日はもう解散しないか、と持ちかける。
「うーん、でも本多くん時間にルーズだからさ、もうちょっとだけ待ってみよう」
胸の前で腕を組み考え込むようなポーズを取りつつ、俺の提案をやんわりと却下。そして待っている先輩の名前は本多さんと言うらしい。
いずみ先輩がそう言うのなら、俺がとやかく言う権利は無い。了解した旨を伝え、立ち上がりかけた膝を再び深く折り椅子に腰を下ろす。
しかし俺としてはどこか納得がいかない部分があった。自分が所属しているサークルがあと一週間で廃部になると言うのに、三十分も遅れているにも関わらず連絡もしない。これはルーズ云々以前に人としてどうなんだろうか、そんな説教臭いことを考えてしまう。
いや、仮にも相手は先輩だ。それにもしかしたら何か抜き差しならない理由があって遅れているのかもしれない。これぐらいで怒るのは流石に心が狭すぎる。うん、よし、ここは大人になって俺が折

れておこう。

そのまましばらくの間待つが、やはりその本多さんと言う人は現れない。気づけば時計の長針が数字の１５を指していた。

「先輩、さすがに遅すぎるんじゃないですか？」

「そうだねぇ……どうしたんだろ本多くん。もうちょっとだけ待とうか」

いずみ先輩はテーブルの上で組んだ腕にあごを乗せ、悩ましげな表情を浮かべながら上目遣いでこちらを見る。酔いは覚めているようで、部室ではいつも桜色に染まっている頬が、今だけは雪のような透き通る白に変わっている。

なんとも暢気ないずみ先輩に、俺は思わず溜息を吐く。こういう人誰に対しても寛大で、人を嫌うことを知らないのが先輩の良いところではある。でもこればっかりはさすがに人が良すぎるのではないだろうか。

先程はこちらが折れたが、今回は先輩の意見を素直に受け入れること無く反論する。

「ちょっと無責任じゃないですかね、その本多さんって人」

「うーん、でも何か用事があるのかもしれないし……」

あくまでその本多さんの肩を持つ先輩に、俺は少しばかりの苛立ちを感じる。この大事なときに、こんな無責任なことを出来る人が、そんなに大事なのか、と。

「用事があるんなら、電話の一本でも入れるのが筋じゃないですか？」

声を発した自分が意外に思うほど、俺の言葉は氷のように冷たかった。栗山と関本さんが俺をなだめるように声をかけるが、俺はいずみ先輩を真正面に向けたまま二人への反応を示さない。

「それはそう……だけどさぁ……」

もの悲しげな表情を浮かべた先輩はそのまま黙り込む。それを見て俺は思わずはっとし、自分のしたことの愚かしさに気づく。

先輩は良心から遅刻している人をかばっただけで、俺なんかに刺々しい言葉をぶつけられるいわれは一つも無い。そんなこと、考えなくてもすぐにわかることだ。
いっそ、そんなこと私に言われたって知らないよ！　ぐらいの事を言ってくれれば良かったのだが……。これではただの先輩いじめだ。
いたたまれない気持ちから、俺は渋々ながら先輩に謝る。
「すいません……ちょっと言葉が過ぎました」
「ううん、私はいいの。それに本多くんが遅いのは事実だし……本当にどうしたんだろ」
心配そうな声色でそう呟き頬杖をつき、首をかしげる。目尻の下がった心配げな瞳は本多さんの到着を待ち望む様にじっと部室の扉を見つめている。
先輩の憂いのあるその表情はどこか彼氏を待ちこがれる彼女の様に思え、なんだか不快な物を胸に突きつけられた様に感じた。別に先輩が誰と仲良くしようが、その本多さんと付き合っていようが俺には関係は無い……けど。なんて言ったらいいのだろうか、上手く説明ができない。
言いたいことがあるような、でもそれが何なのかわからず、俺は心にしこりを残したまま黙り込む。
俺が変に空気を悪くしてしまったせいで栗山と関本さんは気まずそうに黙ったまま。先輩は先程の切ない横顔もどこへやら、今は自分の髪の毛で鼻先をファサファサとくすぐり、なんとも間抜けな表情を浮かべている。
部室のなんとも言い難い思い空気に耐えきれず、俺は飲み物でも買ってこようと思い席を立つ。
ドアノブに手を掛け扉を奥へ押すと、普段は立て付けの悪さからかなり重いはずの扉がまったく手応えがないほどあっさりと開く。
予想外な扉の軽さに、俺はドアノブを握ったまま前につんのめり、何か柔らかい物に額を軽くぶつける。感触から言ってそれは人間で

あった。どうやらこの人がドアノブを引く瞬間と、俺がドアノブを押す瞬間が偶然合ってしまったらしい。
「あっ、すいま……」
そう謝りながら顔を上げる――――――そこには俺を鋭く睨みつける男性が仁王立ちしていた。
鋭く釣り上がった切れ長の瞳は殺気の籠もった……と言うより、殺気の固まりのようで、その瞳に視線を向けられるだけで俺は震えながら立ち竦むことしか出来ない。
と、とにかく早く謝らないと。そう思った瞬間、その男性は俺の胸ぐらを鷲掴みにし、小さく舌打ちをしながら口を開く。
「ってぇな……誰だテメェ？」
低い声で呟き、先程よりさらに近い距離で、その狂気じみた恐ろしさを持つその瞳を俺に向ける。
謝らなきゃ。俺はどうなるんだろう。殺される。苦しい。痛い。色々な事が頭の中を巡るが、俺はただただ歯をガタガタと震わせる。
何か言わなきゃ、そう思うが声が出ない。これほどに人間を恐ろしいと思ったことが、今までの人生であっただろうか？
「ちょっと本多くん！　飯原くんから手離しなさいっ！！」
いずみ先輩の怒りを込めた叫びが響き、その瞬間俺を掴んでいた手からするりと力が抜け、俺はその場に腰を抜かしたみたいに座り込む。
ほん……だ……くん……？　このひとが……？
頭が回らない。状況が全く飲み込めない。いずみ先輩はまだ大きな声で本多さんに喚いているが、耳から入った言葉は脳のフィルターに何も残らず、ただそのまま外へ流れていく。
とにかく、この人が先輩の言う本多さんなのだ。漫画の上手い本多さんだ……漫画？
この人が――――――漫画？

見上げたそこにいるのは、依然としてナイフの様な鋭さを秘めた瞳でいずみ先輩を睨む本多さん。こんなその筋の人か悪魔の化身みたいな人が漫画？

あり得ないあり得ないあり得ないあり得ない……。この五文字だけが、ずっと俺の頭の中をぐるぐると回り続けていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9927g/

routine campus

2010年10月9日23時48分発行